

## 死が伝えること



中村 聡也

南米ブラジルの熱帯雨林アマゾンで今年9月、イルカが大量死した。これまでに確認された死骸は229頭。主因とされるのが、ペルー沖の海面水温が上がる「エルニーニョ現象」などで引き起こされた深刻な干ばつだ。

地球上の淡水の20%が流れるアマゾンで9月11月は乾期に当たりますが、今年は雨量が一段と減少。川の水位が下がり、イルカの生存が不可能なほど水温が上昇したことが大量死につながったとみられている。

世界自然保護基金(WWF)ブラジルによると、死んだのは、国際自然保護連合(IUCN)のレッドリストで絶滅危惧種に指定されているピンク色の「アマゾンカワイルカ」と灰色の「コビトイルカ」。このうち159頭の死骸は、北部アマゾナス州のフェ湖で見つかった。湖の水温は当時、平年を7度上回る39度前後だった。この湖に生息するイルカの約10%が死んだと推定されている。残り70頭の死骸も別の湖で見つかった。

アマゾンは世界で数少ない淡水イルカの生息地

だ。いくつかの個体は餌付けされ、水中でふれあうことができるなど観光資源にもなっている。イルカの生態に詳しいWWFブラジルのマリアナ・フリアスさん(35)は「このような大量死は過去に例がない。イルカの出産周期は数年に1度で、すぐに個体数は増えない」と話す。

アマゾンでは今年、イルカの大量死以外にも、干ばつによる被害が相次いだ。一帯には先住民を含め、推定約3000万人が暮らす。川が干上がり、一部の集落が孤立。主な交通手段である船舶が航行できないとこともあり、食料や水の運搬に支障が出た。住民の主要なたんばく源となる魚も大量に死んでおり、ブラジル政府は少なくとも50万人の生活に影響が出ているとの見方を示す。

ただでさえ、アマゾンでは人間による農地や牧草地の開発を目的とした違法な野焼きや伐採などを背景に熱帯森林が消え続けている。雨期は例年、12月ごろに始まるが、干ばつが収まるかは分からない。フリアスさんは「今の状況が続けば、イルカの死骸はまだ増える」と見る。イルカの大量死は、地球温暖化への対応に国際社会が追われる中、自然界が発する新たな警告だ。アマゾンは今、乾きつつある。